



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	島田三郎『開国始末一井伊掃部頭直弼伝』：歴史・伝・小説（前）
Author(s)	吉岡，亮
Citation	国語国文研究，122，43-51
Issue Date	2002-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93723
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_122_43-51.pdf



島田三郎『開国始末—井伊掃部頭直弼伝』

——歴史・伝・小説——（前）

吉 岡 亮

序

本論は、明治二十一年に出版された島田三郎⁽¹⁾の著作『開国始末』を同時代の〈歴史〉〈文学〉の問題系を参照しながら分析することを通して、明治二〇年前後の「歴史」「伝」「小説」の言説の絡み合った様相の一端を明らかにすることを目標としている。

先行研究において、『開国始末』について最もまとまった形で言及しているのは、『開国始末』を収録している『島田三郎全集』第三巻⁽²⁾の西田毅による「解題」である。

『開国始末』出版後、内藤耻史・朝比奈知泉・福地源一郎らの評が新聞・雑誌等に掲載された。⁽³⁾それに対して、島田は明治二十五年四月一七日、東京錦輝館における「開国始末に対する疑問」と題する演説で、彼らの批判に対する反論を行っている。西田毅はこの「開国始末に対する疑問」を参照しながら『開国始末』の特徴を考察して

いる。西田は、『開国始末』を、「尊王攘夷運動の原動力となった水戸学や水戸藩の役割を過大評価する維新史観」によって定着した「朝敵」井伊直弼というイメージに対して、彼の「雪冤と功業を冷静に見直そうという動機に基づいて執筆された最初の研究業績」とし、「井伊再評価を含む新たな維新史観の形勢に向けて精力を投じた」と評価している。⁽⁴⁾また、その歴史叙述の方法論的特色として、「証拠によつて事実を論断する（中略）証拠主義的」側面や「内外の政治情勢の推移の中で井伊の政治的実践を浮彫にする試み」がなされている点などを指摘している。

西田の考察は『開国始末』の特徴を的確に要約しているものと言えるが、井伊直弼の評価の転換やその叙述の特色が同時代のどのような議論と関連していたのかという点、あるいは、そうした試みが同時代においてどのような意味を有していたのかについてはほとんど触れられていない。私の考えでは、『開国始末』は、明治前半期における歴史叙述の方法論的試行の分岐点に位置づけることができる

テキストであると同時に、〈歴史〉と〈文学〉の境界のあり方を具体的に検証する上で一つのたき台となり得るテキストでもある。そうした視点に基づいて、西田毅が触れていない『開国始末』と同時代の〈歴史〉〈文学〉の言説のインターテクスチュアルな関係に焦点を当て、明治前半期の〈歴史〉の言説の動態、及び、〈歴史〉と〈文学〉の言説の連関を浮き彫りにすること。そこに本論の目論見がある。以下では、本論の各節でどのような観点から『開国始末』を分析していくのかについて、簡単に触れておきたい。

島田は『開国始末』をそれまでになかった「新しい」歴史記述の試みとして意味づけている。第Ⅰ節では、彼がテキストのどのような要素を「新しさ」として意味づけていたのか、そして、そうした意味づけを可能にしたのがどのような言説であったのかを、主に明治二十年前後の〈歴史〉の問題系を参照しながら明らかにしていく。第Ⅱ節では、井伊直弼の表象という点から、島田の言う「新しい」歴史記述がどのような形で具体化されていたのか、また、その記述にどのような言説を援用していたのかを検討する。第Ⅲ節では、『開国始末』の「伝」としての側面に焦点を当て、島田が同時代の〈文学〉の問題系をどのような形で参照し、自らのテキストの意味づけを行っていたのかを考察していく。

I 明治二十年前後の歴史改良論

島田三郎は『開国始末』の原稿完成後、「事実の誤を減じ」、「体裁議論の失当を改め」るために、幾人かに「批評」を請うた。その過

程で「専ら彦党の証文を基礎として説を立て一方に偏するの嫌」があり、「井伊直弼の爲めに弁護するの傾向」があるという「二条の注意」を批評者から与えられた。こうした指摘に対して、『開国始末』冒頭の「撮記五則」で島田は自らの立場を次のように記している。

今日に至る迄は時勢を憚るが爲めに一方の証文世に出でずして操觚者も亦史漢通鑑の外別に史伝の体あるを知らざる者多し是れ近史の材料一方に偏し史筆の精神依然鎖攘の氣習を帯びたる所以にして予の撰著は却て之に他の新元素を加へ論局是れが爲に變じたるに過ぎざるなり且世伝既に安政の時事を誤り又直弼の批評を謬れり故に唯事実を平易に記し去るのみにては其真相を觀すに足らずして必や之を世伝と対照し其異なる所の点を指明して其誤謬を弁正せざる可からず又其世系及び私行を叙して予め其人の性質と政治上の思想の由て来る所とを表出することを要す西儒がクロムウェル、ヘーシングの事を記するに当り弁論を事蹟の間に挿みたると意を同くする者にして弁護の傾向あるは予の初めより避くる所に非ず⁶⁾

本文の別の箇所の記述も参照しながら、彼のここでの議論を整理していきたい。島田は、「近史」と自らの著作の差異を「史伝の体」・「材料」・「時事」・「批評」という三点において述べている。「材料」という点では、島田は、井伊の家臣であった宇津木六之丞が記した公務記録「公用方秘録」や、井伊周辺の人物の書簡を収録した「秘書収録」など、それまで公になつていなかった彦根藩側の史料を使用

している。また、『開国始末』には、当時の事情に詳しい人物に取材し、その証言に基づいて過去状況を再現している箇所もある。島田は、こうした材料を逐一「記事の間に挿入」することで、自らの説が「架空の褒貶」ではないことを示している。西田毅が指摘する『開国始末』の「証拠主義的」側面とはこうした点を指している。

「史伝の体」と「時事」「批評」は、先の引用部では密接に関わるものとして語られているが、まず「時事」「批評」の問題を先に見ておくと、島田の言う「世伝」の時事・批評の誤謬は、材料が「一方に偏し」ていることと「史筆の精神依然鎖攘の氣習を帯び」ていることに起因している。彼の言う「鎖攘の氣習」を帯びた「史筆」とは、「漢土の旧学を奉じ安政年間思想」を懐いているもので、具体的には、「東洋の史伝」に多く見られる、「好悪の念を記述の間に挟み」「時態人物の真相を乱り」、「説の異同を事の正邪に混じ同を揚げ異を排し」、「政論の異議を以て正姦に分評」するような「陋見」を有しているものである。こうした「史氏が偏僻の見を持し想像の冤を人の戸上^{（じじょう）}に被らしめ」るような方法に対して、島田は確かな証拠に基づいて「事実を直書し」、「真相を来者に示し」、「公平」な「批評」を行うものを理想的な「史筆」とする。

こうした理想的な史筆の実現には「史伝の体」そのものの改変が不可欠である。そこで島田が持ち出しているのが、「史漢通鑑」／「西儒」の歴史記述、という対立である。「史漢通鑑」とは、直接的には『史記』『漢書』『資治通鑑』といった中国の史書を指しているが、ここでは、それらの体裁を踏襲している日本の史書も含んだ形で言われていると考えられる。そうした和漢の史伝の体に島田が対置して

いるのが、西儒が採用している「弁論を事蹟の間に挿」む方法であり、これによって「世伝と対照し（中略）其誤謬を弁正」したり、「其人の性質と政治上の思想の由て来る所とを表出する」ことが可能になった、とするのである。

以上の整理から分かるように、島田は『開国始末』を、新史料を使用して過去の史書の誤謬を正し、東洋の史伝に見られる偏僻の見を排し、西儒の歴史記述の体裁に倣った、「新しい」歴史記述の試みとして位置づけている。こうした彼の認識に寄り添う形で、『開国始末』の上部に評を施している末松謙澄は、その「証拠主義的」側面を捉えて「記事多引手記日録以証之、自是良史之一体、西人所謂『メモアール』是也」とし、「弁論を事蹟の間に挿」む方法に関しては「記事中挿議論、是西史秘訣」と記している。

明治二〇年前後においては、「記事中挿議論」という方法が、従来の和漢の史書に欠如しているものとして捉えられていた。例えば、末松謙澄は「支那史体ヲ難ス^{（し）}」において、漢文史書を「紀伝」「編年」「記事本末」の三つに分類し、それらが「真成ノ歴史ヲ編纂スル材料」に過ぎないことを指摘した上で、三つの「体」に共通する「欠典^{（きでん）}」を次のように記している。

何体ニ関ハラス東洋正史ノ大欠典ハ紀事間ニ挿ムニ記者ノ議論ヲ以テサルコトナキニ在リ蓋議論ナキノ記事ハ血肉ナキ人体ノ如ク索然タル枯骨ノミ縦横シテ少シモ精彩姿色ノ美ヲ呈スルコト能ハス故二人目ヲ楽マシムルニ足ラス

このように述べた上で、末松は『史記』『資治通鑑』を例に挙げ、それらに「議論」が欠けていることを言う。『史記』には「太史公曰」という「賛」が付されているが、「其ノ論スル所ハ偏頗狹隘ニシテ見ルニ足ルヘキモノ少ナク甚タシキハ之ヲ以テ自家ノ不平ヲ訴フル具トナシ史家ノ本職ニ違フ事多シ」。また、『通鑑』も「司馬溫公曰」ノ類ヲ別項ニ掲げているが、「其ノ論スル所ハ例ノ孝弟忠信ヲ説教スルニ過キス史家ノ本職ヲ去ルコト固ヨリ遠シ」。末松の言う「議論」の不在とは、「紀事間」に「議論」を挿入しないという形式的な面と、「議論」らしきものがあってもそれが「議論」と呼ぶに値しないという内容的な面の、両面に対する批判となっているのである。

こうした「東洋正史」の欠点をいかに克服するか。末松は、正史実録／小説稗史という枠組みを踏まえて次のように言っている。東洋書中歴史ノ真体ヲ得タルモノハ（中略）正史ニ在ラスシテ却テ野乗鄙史軍談書類ニアリ（中略）若シ東洋ノ史家ニシテ野乗鄙史ノ体裁ヲ賤マス之ヲ正史ノ編纂ニ利用シトラハ其裨益ハ果シテ如何ンソヤ。彼の基本的な関心は、東洋正史の「体裁」をいかにして改良するかという点にあり、「議論」の不在に対する批判もそうした点から提示されているものである。

末松は小説稗史の「体裁」を正史実録に利用すべきだとしているが、正史実録というカテゴリーの内実を組み換えることでその改良を行おうとする議論も同時代には存在していた。例えば、田口卯吉は『支那開化小史』の「例言」で、「史を記するの体」として「編年体」「記事体」「史論体」の三体を挙げ、「封建潰乱の事実を表示する」には「編年体」が、「人の履歴を記するは記事体」が、「社会の大勢

事情変遷を記するは史論体」がそれぞれ適していると述べた上で、次のように記している。

史と論とは異なり論は所見を述ふるものなり史は事実を記するものなり故に支那の史家史論体を以て史と称せざるなり然れども（中略）人情風俗及び事情の変遷の如きは多くは冥々の間に発成するものにして（中略）且つ数多の事実湊合して一顕像を為すものたるを以て史家各々所見を異にするの弊あるを免かれず然れども之か為に所見を交ふべからずと云ふは其変遷を記すべからずと云ふなり則ち社会の史を記すべからずと云ふなり史豈に論と異ならんや共に所見を述ふるものゝみ

支那の史家卓見多し其興廃存亡の理を説く極めて密なるものあり不幸にして之を論文として史中に齒せざるが為に敢て精神を竭して之に従事するものなく唯々一時の変遷を述ふるに止まれり

また、『支那開化小史』と同年に発表された『歴史概論』¹⁰において、田口は年代記／歴史という区分を用いて、「春秋編年の体」のように「関係なき種々の事件を年月に因りて区分し一処に記載」するものは「年代記」であり、「歴史」に必要な「論理」が欠けていると指摘する。その上で、「論理」を内包した「真正の史体」として「史論体」を挙げ、それは「社会全体に渉れる事件に関して原因と結果とを照合して記」す「開化史体」「文明史体」と同一であるとしている。

明治前半期において史体を分類する際には、末松のように編年・紀伝・紀事本末の三種を挙げることが一般的であった。それに対し

て、田口は「史と称せざる」「史論体」を正史のカテゴリーに組み込むことで、「真正の史体」のイメージを創り出そうとしていたのである。

田口と末松に共通しているのは、従来の和漢の史を「唯々一時の変遷を述ふるに止ま」る、「歴史ヲ編纂スル材料」Ⅱ「年代記」とし、それと「真正の史体」Ⅱ「歴史」とを区別する視点である。¹⁾そして、田口の議論においては、この年代記／歴史という分割が、「論」の問題と結び付けられている。田口の考える歴史とは、「種々の事件を時系列に従って並べただけでは明らかにならない「社会」の「変遷」の様を「数多の事実」を組み合わせて描き出すものであり、「論」はその変遷の「原因と結果とを照合し」、「興廃存亡の理」を説明するものとしてイメージされている。年代記を歴史にふさわしい姿に変える要素として「論」が把握されているのである。

末松・田口の議論から分かるように、明治二〇年前後においては、「記事中挿議論」という方法は史体改良の文脈において取り上げられ、正史／稗史と歴史／年代記という二つの枠組みを橋渡しするものとして意味づけられていた。「撮記五則」における島田の言葉もこうした点を踏まえて言われているものである。ただ、末松や田口が問題にしている正史あるいは歴史は、国家や社会に関する重要な事件やその変遷を一定の体裁を用いて記録するものとして捉えられている。それに対して、副題に「井伊掃部頭直弼伝」とあるように、『開国始末』は一人の人物のあり方に焦点を当てる「伝」であり、末松や田口の考える歴史とは必ずしも重なり合うものではない。その意味では、島田は「論」を備えた「真正の史体」を希求する議論を

参照しながら、「新しい」「伝」を創り出そうとしていたと言うこともできるだろう。

しかし、明治二〇年前後の〈歴史〉の問題系においては、右のような歴史／伝という分割自体を無効にするような言説が登場していた。例えば、島田は『開国始末』で伝について次のように記している。

従来の伝記は大抵単に其人直接の身事に止まりて関係の及ぶ所を略せり故に其人の生死経歴を年月の下に繋記して記伝の本領とするに至る是れ恐くは記伝の精神を得たる者に非ざるならん

これも、「其人の生死経歴を年月の下に繋記する年代記に過ぎない」「従来の伝記」を改良しなければならないという、年代記／歴史という区分に基づいた議論となっている点で、歴史の言説に由来する発想であることは間違いない。と同時に、伝に関する同時代の次のような言説とも連動していた。

従来人の伝を記するもの、多くは単に其言行を記するを以て、其任を尽せりと為す、故に其記する所を見るに、曰く、幼にして云々の行あり、長して云々の業あり、且つ之を賛して曰く、亦た偉ならずや、亦た豪傑なるかな」と、是れ亦た名文なきにあらざるなり、英人マコーレー公出てて、其技を示すに及び、此等の文章、復た見るに堪へざるなり、蓋し公の筆法は、単に其人の言行を記せずして、備さに当時の事情を述へ以て之と対照することとなり

〔中略〕其批評を為すに当りてや、或ひハ哲学に徴し、或ひは小説に比へ、或ひは政治に基き、或ひは宗教に拠り（後略）（『経国亀鑑』全 一名チャタム伯ウキイリヤムビット伝、田口卯吉の「序」、傍線原文）

右の田口の言葉からは、伝の改良という点で、二つの認識が読み取れる。一つは、島田同様、「単に其人の言行を記」すだけでなく、「当時の事情」との「対照」において歴史上の人物を描き出していく形に伝を改良する必要がある、という認識である。もう一つは、「其人の言行」と「当時の事情」を対照し、それに対するコメントをなす際には「名文」ではなく、「批評」でなければならぬ、という認識である。この「名文」／「批評」という分割は、末松の言う「東洋正史」の「賛」／「議論」という分割と重なっている。「論」の質的な改良を志向する言説は、「批評」という語を軸にして編成されていたのである。そして、「当時の事情」と「其人の言行」の対照を可能にする要素として意味づけられている点で、「批評」は歴史／伝という分割を無効にするものでもあった。全体史（歴史）と個人史（伝）の連結を可能にする要素として「批評」が捉えられていたわけである。

ところで、島田・田口の両者が理想化している、「其人の言行」と「当時の事情」とを対照させる「伝」というイメージにはモデルが存在していた。先に引用した『経国亀鑑』の原著者マコーレーのテクストである。それが端的に分かるのは、少し時代が後になるが、竹

越与三郎の『マコーレー』の次のような記述である。竹越は、マコーレーの『英国史』が成功した理由の一つとして、彼の歴史記述が「個人的性質」に富んでいる点を挙げ、次のように記している。

科学なるものの開けたる以来、歴史は大なる変化を受けたりき。需要供給、食物の養料、風土の善悪は、歴史上の事実を判断する唯一の材料となり、物質は凡ての物となり、道理、名譽、品格、道德、宗教、人物、人情は、凡て歴史より引き抜かれたり。（中略）マコーレーと同時代のカライルの如きは、科学論に反動して、人物論に移り、社会の盛衰興廃は人物の有無によるとなし、遂に英雄崇拜論まで走り去り（中略）。マコーレーも固より科学論には満足せず、然れども英雄崇拜論までは走らず一方には文明的の主義と、一方には英雄論の主義とを調和して、其の歴史を作る。（中略）巧妙なる人物論を以て、奔放雄大なる大勢の図画に配合す。其近世の「史体を如何にせん」との疑問が、一時彼に於て解釈せられんとしたるが如きもの、良に故ある也。（傍線原文）

「文明的」観点から「大勢の図画」を描き出し、それに「英雄論の主義」に基づいた「人物論」を「配合」する方法。そうした方法を採用したマコーレーのテクストは、歴史と伝の両方の性質を兼ね備えた史体と捉えられていたのである。

島田ももちろん『開国始末』を書く際にこうしたマコーレーの史体を意識していた。それは、先に引用した「撮記五則」に「西儒がクロムウェル、ヘースチングの事を記するに当り」と、「ヘースチン

グ」が挙げられている点からうかがうことができる。マコーレーのヘスチングス伝は、原著を明治十一年に東京大学文学部が出版し、明治二十一年には『印度奇観¹⁷⁾』という書名で翻訳されている。『印度奇観』の記述を借りると、このテキストは「虞れーぐ」氏ノ「兵すちんぐす」伝の「妄讚」を改め、「厳正」で「公平無私ナル批評」を行うことで、ヘスチングスの真の人物像を明らかにしているものであった。島田は、こうしたマコーレーのテキストと重ね合わせる形で、井伊直弼に対する従来の誤った評価に代わる「公平」な「批評」を行おうとしていたのである。

また、『開国始末』の次のような記述からも、島田のマコーレー的な歴史記述に対する意識をうかがうことができる。

歴史は社会の伝記にして伝記は個人の歴史なり二者の範囲大小相異なりと雖其性質全く相同くして共に記実を主とするに至りては則ち一なり記実の要は（中略）社会人物の真相を描き出し読者をして其時態を追観し其人品を臆想せしめんことを要す

西田毅が指摘する「内外の政治情勢の推移の中で井伊の政治的実践を浮彫にする」という『開国始末』の特徴は、右で検討してきたような明治二十年前後における「歴史」の言説と連動しており、それを踏まえて島田は自らのテキストを「新しい」歴史記述として意味づけていた。それは、「内外の政治情勢」という全体史と「井伊の政治的実践」という個人史とを「批評」によって連結する、歴史と伝の両方の性質を備えたマコーレー的な史体を理想化する言説で

あった。そうした史体の実現に不可欠とされたのが、「記事中挿議論」という方法と、「議論」を「批評」と呼ぶに相応しいものに改良することだったのである。

注

- (1) 沼南島田三郎（一八五二年～一九二三年）は、明治から大正にかけて活躍した政治家・新聞記者で、演説家・キリスト教系社会運動家としても知られている。静岡県に生まれ、沼津兵学校を経て、大学南校・大蔵省英語学校に学ぶ。明治二〇年代には、改進黨系の政客として神奈川県会議長・衆議院副議長等を務めた。新聞記者としては、明治二〇年代には毎日新聞の主筆として執筆活動を行い、二七年に同新聞社の社長に就いている。
- 『開国始末』以外の『歴史』に関係する仕事としては、欧米の賢婦・義士の伝記のアンソロジー（『通俗人民権百家伝』（出版人・稲田佐吉、明治十一年八月）の抄訳や、トーマス・ヘンリー・ダイアー『近世泰西通鑑』（興論社、最終巻の奥付では明治二十三年十二月出版）の翻訳などがある。後者では、島田の他、波多野伝三郎、沼間守一等が翻訳に携わっている。
- (2) 龍溪書舎、平成元年五月。
- (3) 内藤耻史『開国始末弁妄』（『安政紀事』明治二十一年六月）、朝比奈知泉『開国始末を讀む』（『国民之友』第二〇・二一号、明治二十一年四月・五月）、福地源一郎『東京日々新聞』明治二十二年六月二日。

- (4) 「開国始末に対する疑問」も全集・第三巻に収録されている。
- (5) 明治期の明治維新観の変遷とその中の「開国始末」の位置については、田中彰『明治維新観の研究』（北海道大学図書刊行会、一九八七年三月）を参照。田中は、「開国始末」を「佐幕派維新観」に基づいた「雪冤勤王型」の著作と位置づけている。
- (6) 本論における「開国始末」の引用は全て明治二十二年三月出版の輿論社版に拠る。
- (7) 末松謙澄講述、宮崎米山筆記、『東洋学芸雑誌』第五十六号、引用は『学芸雑誌』第二号（明治十九年五月）による。
- (8) 正史実録／小説神史という枠組みに関しては、拙稿「歴史を語る芝居——明治初年／十年代における〈演劇〉と〈歴史〉——」（『日本近代文学』第六五集、二〇〇一年十月）を参照。
- (9) 秀英舎、明治二十二年二月。
- (10) 『東京経済雑誌』第四三二号・四三三号（明治二十一年八月一日・一八日）。
- (11) 年代記／歴史という枠組みに基づいた明治期の歴史に関する議論については、亀井秀雄「歴史との拮抗」（『小説論』岩波書店、一九九九年九月）を参照。また、この枠組みを一般的なレベルで考察しているヘイドン・ホワイ特『物語と歴史』（リキエスタの会、二〇〇一年十二月）も参照。
- (12) 博聞社、明治二〇年二月。
- (13) 「批評」という語が明治二〇年前後において有していた意味に関しては、小森陽一「近代批評の出発」（『批評空間』第一号、一九九一年四月）を参照。

- (14) Thomas Babington Macaulay（一八〇〇年～一八五九年）。明治期におけるマコーレーの受容については、柳田泉「明治十年以後の文学思想（つづき）」中の「二人のトーマス」（『明治初期の文学思想』春秋社、一九六五年七月）、佐藤孝己「明治啓蒙期とマコーリ」（『英学史研究』第四号、一九七二年）を参照。
- (15) 拾貳文豪・第二巻、民友社、明治二十六年八月。
- (16) 「クロムウェル」に関して、島田は本文中で「ラマルタン」の「クロムウェルの伝」を参照したと記している。彼の言うラマルタンは、フランスの詩人・政治家・歴史家 Alphonse de Lamartine（一七九〇年～一八六九年）であると考えられるが、島田がラマルタンのどのようなテクストを参照したのかについては確認することができなかった。
- (17) 前橋孝義訳述、開新堂。佐藤孝己の指摘によれば、マコーレーのテクストは「高専校における英語学習のテクストとして用いられることが多く」、例えば、早稲田大学の前身である「東京専門学校」の英語学科では外山正一が伝記という学科のなかで（中略）ヘスチングス伝、クライブ伝などを教えた。佐藤は、その背景に「当時の美文好み英雄崇拜熱」があったことを指摘している。前掲「明治啓蒙期とマコーリ」参照。東京専門学校については『早稲田大学八十年誌』（早稲田大学出版部、一九六二年十月）もあわせて参照。なお、ヘスチングス伝やクライブ伝は『世界大思想全集72 マコーレー論文集』（戸川秋骨訳、春秋社、一九三三年二月）にも収録されている。

(よしおか りょう・北海道大学大学院博士課程)